二

油紙から三通の書状が出てきた。

一通目は父正睦からの手紙、二通目は中居半蔵からのもの、残りは差出人の名がなかった。

磐音はまず父の手紙を開いた。

＜磐音殿、そなたにこの書状届くや否や存ぜねど、東源の丞どのの進めで一縷の望みを託し一筆参らせ候。そなたが関前を出奔して以来、父の気力も失くせ候。そなたらが大志を胸に城下に帰着致せし事、昨日の事のように記憶致しおり候。近頃、そなたらが帰国致せし事そのものが夢であったと考える事頻り。さて愚痴はこの辺りにて噤み候。そなたらの帰国の翌日に起こった事件、なんと不幸なことか。諦めきれぬ思いを抱いて無為の時を過ごし候ども、近頃の城中の出来事を鑑みるに、磐音らは作為的に戦わせられ、破滅の道を辿らされたのではなという推測候。磐音、そなたが出奔する前にその事に思い至らざりし事、後悔致しおり候。磐音、父の申すこと、心して耳を傾けるよう願い候。豊後関前藩には、これまでの長年の政治手法を継続なさろうとする国家老宍戸文六様一派と、それでは関前藩が苦境に陥る、改革をせねばと考える有志の二派がおる事、説明の要もなきに候。父もそなたらも一派に偏せずとも、このままでは立ち行かぬと考えし者に候。このことを文六様はどう考えなされたか。江戸にて新しき経済思想を勉学、藩のために役立てようと勇躍帰国致せしそなたらを、策を以って破滅に追い込まれしか。父はこの想念が取り付いて以来、幾度も繰り返し考え候。父は結論を見出しえず。ただ、父の周辺に起こりし事の数々を日誌に記して保管致しおり候。もし父の身に異変あるとき、磐音、そなたは国許に帰り、父の日誌を回収の上、藩正常に役立てて頂きたく認め候。なお、そなたの身分につき、宍戸様は、藩に無断で出奔致し候故、生来罪科を問うべきところなれど、上意討ちの功績あり、罪を減じて放免の処置と申され候。つまりは坂崎磐音、豊後関前藩の家臣にあらずということになり。磐音、心して聞かれよ。過日、藩主実高様と二人だけになりし折り、実高様はかく申されたり。余は磐音の暇乞いを認めた事、一度もあらず。先頃同様、江戸に留学の身と考えておるとの有り難き仰せに父は涙が止まらず、主君の前で恥ずかしき失態を呈し候。ともあれ、実高様がかく考えられる上は、そなたは未だ福坂実高様の臣、そのことを失念致す事なかれ。この事父の忠言に候。噂によれば、そなた、江戸にて長屋暮らしをしておる由。どのような暮らしを致すとも、福坂実高様の家臣である一事。豊後関前藩の恩顧を受けてきた坂崎家の末裔である事、決して忘るるなかれ。また、もし父の推測が正しければ、そなたに託された使命は朋輩河出慎之輔の、小林琴平の、舞どのの無念を晴らす事、明白也。坂崎家滅亡に代えてもこの望み果たされん事を願いおり候。最後になりしが、奈緒どのの一途忘るるべからず。蛇足ながら付け加え候＞

磐音は瞼が潤むことを禁じ得なかった。が、気を取り直して、今度は差出人のない手紙の封を開いた。

それは幼き頃から承知した、奈緒の水茎の跡であった。

＜磐音様、取り急ぎ一筆参らせます。

一年前の夏の出来事は夢幻ではなかったのでしょうか。

奈緒には理解がつきませぬ。

わたしにはっきりと言えることは、

姉の舞には不義の事実などかけらもなかった事。

ゆえに義兄慎之輔様は姉を手討ちにする理由はなかった事

また兄琴平が慎之輔様を成敗なさるいわれもなかった事

そして最後に、磐音様が上意討ちの命を受ける理由もなかった事

にございます。

どこでどう歯車が狂ったのか、近頃、城下で噂される国家老様の陰謀という考えで納得するには、あまりにお大きな犠牲でございました。さらに小林、河出の両家が廃絶の憂き目に遭うなど、これを悪夢と言わずして何を言うのでしょうか。

磐音様、奈緒には理解が至りませぬ。

なにかどうなれば、このような悲惨な結果になるでしょうか。

愚痴ばかり申しました。

奈緒の一家は城下外れの岩城村の庄屋陣左衛門様の家作をお借りして過ごしております。

磐音様、奈緒はどんな境遇にあろうとも幼き時からの気持ちに変わりはございません。

磐音様は兄を上意打ちした事に責めを感じ、関前城下をお出になされたのでございましょう。

奈緒は、怨みます。

磐音様の苦しみを私もともに分かち合いたかった。それは出来ぬ相談なのでございましょうか。

奈緒は磐音様の妻にございます。そう信じることで生きる勇気が湧いて参ります。

江戸がどのようなところが存じませぬ。

ご壮健に過ごなされることを奈緒はどんな時にもお祈りしております。

この手紙、突然、目付頭の東源の丞様が我が家においでになり、江戸でもしかして磐音様に会うやもしれぬ、その折りには必ず渡すと申され、神仏に願いをかけつつ認めました。

磐音様、江戸土産の伽羅の匂い袋、伊織様より頂きました。肌身離さずに持っております。このお礼もまだでございましたね。

夢なら覚めよ、と朝起きるたびに願いながら、匂い袋に勇気付けられながら、生きております。

磐音様も、お健やかにお過ごしください。奈緒＞

磐音は瞼が熱くなるのを抑えつつ、奈緒から野手紙をゆっくりと巻き戻した。

東源の丞は磐音の心底を見ぬように独りで杯を舐めていた。

磐音は最後の手紙、中居半蔵のものに手をつけた。

＜坂崎磐音どの、東海道保土ヶ谷宿の旅籠にて急ぎしたため候。

それがし、目付頭東源の丞殿の手引にて、短い時間ながら実高様に面会致し候。早足の仁助によってもたらされた国許に近況、さらには宍戸派の専断横暴など掻い摘んで申し上げたところ、殿は驚愕なされて、特に不正の借入金一万六千五百両の一件ならびに中老坂崎正睦様の蟄居閉門の事実に大いに驚かれ候。半蔵、真実なれば、豊後関前藩の一大事、なれど余は参勤出府の道中、何も出来ぬ、と嘆息なされたり。お労しい限りにござ候。

さて、実高様との話し合いにて、それがしが急遽国表に立ち戻ることを命じられ候。

その任とは、国許を専断される国家老宍戸文六様の不正の確たる証拠を早急に集めよとの仰せに候。殿はまた江戸にて坂崎磐音が藩のために働いている事実に大いに驚かれ、なんとも嬉しき知らせかなと大層喜ばれし段、そなたに伝え参らせ候。

さて、坂崎殿、そなたの父の蟄居閉門の一件、昨夏の事件に鑑みて、そなたも急遽関前に密行せよとの殿の指示、急ぎそれがしを追って西下されんことを命じ候。なお細きことは東源之丞殿の指示を仰がれんことを付記致し候。中居半蔵＞

磐音は顔を上げた。

「相分かりましてございます」

「ご分家の志山様が倒れられたのが、なんとも痛い」

東は分家の当主の病気を嘆くと、

「国許に行ってくれるか」

と磐音のかをを正視した。

「畏まりました。ただ、一両日の猶予をいただけませぬか。それがし、江戸にて生計を立てておるに際し、多くの方々の助けを得ております。そちらを疎かにて参るわけにはいきまえん」

「そなた、鰻割きを手間仕事にしているそうな」

「はい、朝の間だけ一刻半ほどの仕事で、朝餉付き百文にございます」

「なんと、六百三十石の嫡男が一日百文の暮らしか」

「東様、いくらなんでも百文では江戸では暮らせませぬ。その他、いろいろと手を染めてございますれば、その方々にお断りせねばなりませぬ」

「相分かった。こちらもそなたが関前へ下向する前にやってもらわねばならぬこともあるでな」

「なんでございますか」

「はっきりした折りに申すわ。今日はそなたとゆっくり酒を飲もうと考えてきた」

「東様、酒より飯をいただけますか。急ぎ仕事がございますので、酒を飲むわけには参らぬのです」

磐音は幸吉とおそめ之頼みを頭に思い浮かべていた。

「なんだ、無粋な奴じゃな」

酒好きの源之丞はそう言うと階下に向かっていた。

「熱燗と飯をひとつくれ」

と怒鳴った。

「東様、十年ぶりの江戸にしては小粋なところをご存じですね」

磐音は座敷を見回すと、

「坂崎、若き折りには１つ２つ、隠れ家は作っておくものじゃ。この家は、先代の女将からの馴染みの茶屋でな、国許に戻っても季節の挨拶を交わしていたのだ」

と説明していた。

そこへ先ほどの女将が注文の品を持ってきてくれた。

「女将、この者は仔細あって藩を離れているが、ゆくゆくは中老職を継ぎ、藩の中心になるべき男だ。よしなにな」

「はい、承知しましたと申したいところですが、東様、私、この方を存じております」

と女将が思いがけないことを言い出した。

「なんじゃ、鰻割きなどで苦労しておるというから、気の毒に思うていたら、茶屋の女将と知り合いか」

「ちょっと待ってくだされ。それがし、一向に記憶にござらぬが……」

女将が笑った。

「いえ、私に関わりがあるのではございませんよ。今津屋様のおこんさんとご一緒に歩かれているのを朝市でお見かけしたのでございますよ。あのとき、讃岐屋のご隠居に浪人者たちが言いがかりをつけているのを、この方が見事な腕前で退散させておしまいになりました」

「坂崎は国許では居眠り磐音と言われておるが、なかなか隅におけんではないか」

磐音は二人に喋られておいて、ご飯に取り掛かった。

「なにしろ、この方の後ろ盾は天下の両替商の今津屋様でございますから、羨ましい限りにございます」

「聞けば聞くほど、腹が立ってきたわ。国許の我らに心労をかけておいて、江戸で分限者と付き合うておるのか」

「東様、女将の冗談を真に受けられて。それがし、今津屋様の用心棒を時折頼まれるだけでございますよ」

磐音はご飯を早々に終えると立ち上がった。

「なんぞ連絡があれば、仁助を使いに出す」

畏まった磐音は、女将に送られて薬研堀を出た。

磐音が向かった先は今津屋だ。

薬研堀の埋立地につながる町が米沢町、柳橋だ。

今津屋とは一足の距離である。

「おや、坂崎様、過日は命を助けられ、まだちゃんとお礼を言っておりませんでしたな」

老分の由蔵が目ざとく磐音の姿に目を留めていった。

「いや、こちらこそ過分な金子を頂戴して恐縮にございます。本来はその礼と報告がございまして、罷り越しました」

磐音は帳場格子の中に座り込んだ。するとおこんが磐音の声を聞きつけて、茶を運んできた。

「お腹は空いてないの」

「そういつもいつも空いているわけではありませんよ。今しがた、薬研堀の茶屋で昼餉を食して参りました」

「まあ、ちょっとお金ができたと思ったら、茶屋でお昼を食べたの」

おこんが睨んだ。

「違いますよ、それがしの財布には一膳飯屋で食べるほどのお金しか入っていません。殿様が参勤で江戸に出てこられて、供で上府された昔の上司に呼び出されたのです。涼風の女将はそれがしがこちらに出入りしていることを承知していました」

磐音が事情を話した。

「国許にお帰りになるので」

「帰参するの」

由蔵とおこんが口々に言った。

「父上が国家老に蟄居を命じられたため、国表に帰るだけの話、長いことではありませんよ」

「いや、女の勘だと、坂崎さん豊後関前藩六万石に戻ることになるわ」

とおこんが宣告した。

「となれば、折角良きお方とお知り合いになれたものを残念ですな」

と由蔵までが言い出した。

「そのようにそれがしを主持ちに戻さんでください。金兵衛長屋の暢気な暮らしがなかなか気に入っているのですからね」

「そうだ、長屋は引き上げるの」

「深川に戻ってきますから、そのままにしておきますよ」

と答えた磐音は、

「老分どの、品川さんと竹村さんのことをよろしくお願いします」

と二人の友の仕事を心配した。

すると、承知しましたと請け合った由蔵に、

「ともかくな、江戸を出られるときは知らせてくださいな」

と念を押されて、冷えた茶を飲んで今津屋に暇乞いをした。

鰻捕りの幸吉が金兵衛長屋に顔を出した時、磐音はすでに外出の仕度をして、亀吉らが縁台将棋を指すの見ていた。

「待たせたかい」

「いや、ちょうどよい刻限です」

「二人の話を聞いていると、どっちが大人だか分からないぜ」

と取った駒を手の中でかちゃかちゃ鳴らしながら、水飴売の五作が言った。

「幸吉どのはそれがしのお師匠だからな、仕方ござらぬ」

二人は六間堀町を出ると、仙台堀に向かった。東西に抜けて小名木川を渡れば、継が仙台堀だ。万年橋から霊雲院の前を抜けて、仙台堀に出た。すると赤木屋の赤い破れ提灯が水面に映っていた。

「いるかな、弓七さんは」

「いるさ、行くところがないんだからな。それより酔っ払ってなきゃあいいが」

幸吉はその事を心配した。

酒が安くて肴もいろいろと揃えた赤木屋は、職人や棒手振り、馬方から船頭、浪人、中間まで、雑多な男たちですでに満席だった。

深川育ちの幸吉は、

「父っつぁん、鋏鍛冶の弓七さんは来てないかい」

と禿頭に手拭いをねじり鉢巻にした親父の潮次に声をかけた。

「迎えに来てくれたんなら、ありがてえがな」

「いや、このお侍が話があるんだと」

「話をするんなら、あと四刻半以内だな。毎晩、たかり酒にへべれけになってやがるんだ」

磐音は、一朱を潮次の手に渡し、

「酒を持って来てくれぬか」

と命じた。

「あいよ」

潮次は、店の隅でだれぞかもは来ないかと、入り口に目を光らせている弓七を指した。

二人は弓七の卓に座った。

どんよりした鋏鍛冶の目が幸吉に言った。

「鰻捕りがなんか用事か」

「いいのかい、豆坊を他人様に預けっぱなしにしてよ」

「余計なお節介をするねえ」

「なに言ってやんでえ。うちの長屋に預けられて、毎晩夜泣きを聞きされてよ、長屋じゅうがまともに寝てないんだぜ。それでもいらぬお節介とぬかすのか、弓七さん」

幸吉に言い負かされて、弓七はしゅんとなった。

生来、気が弱い男なのだろう。細かい顎に無精髭が伸びて、女房にいなくなられた悲哀が全身に滲み出ていた。自分の博奕が招いた悲劇とはいえ、磐音は弓七の様子に身をつまされた。

「弓七さんよ、今晩はこちらのお侍の奢りだ。あんまり飲み過ぎるんじゃねえぜ」

親父が徳利と茶碗を二つ卓に置いた。

弓七は早速徳利と茶碗を掴むと、とくとくと注いだ。そして一息に飲んで、ふううっ。

と息をついた。

磐音はが弓七の茶碗を取り上げた。

「なにするんでえ」

「それがしの話を聞く間だけだ」

「ならはなしやがれ」

「聞くところによると、豆造の夜泣きは、そなたの女房の匂いが染み付いた衣類なんぞ持たせるとやむそうではないか」

「それがどうした」

「ここにおる幸吉どのやおそめちゃんに頼まれて、それがしが吉原に行くことになった」

「女郎になった女房を買いに行く野郎が、いちいち亭主に断ることもあるめえ。買ってにいきやがれ！」

「誤解をいたすな。それがし、そなたの女房を買いに行くわけではない。豆造のために衣類を買いに行くだけだ」

「いらぬお節介だぜ」

弓七は磐音の手から茶碗を奪い取ると酒を注ぎ、がぶ飲みした。

「浪人さん、こいつに何を言っても無駄だぜ」

幸吉はそう言い放ったが、磐音は、

「おしずどのに伝えることはないか」

と弓七に訊いた。

弓七は徳利にかけた手を止めると、実に暗い絶望の眼差しを見せた。

「自分のほうから吉原に身をおいた女なんぞに伝えることなんざ、あるけえ」

幸吉が小さな声で、馬鹿野郎と呟いた。

「弓七どの、おしずどのの店はどこだ」

「角町の新亀楽……」

と弓七は即座に答えた。

磐音が立ち上がると、幸吉も従った。